

平成22年 5月24日現在

研究種目：基盤研究(B)  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19360273  
 研究課題名（和文）口述集積型データベース（LUDS）を用いた自律型景観利用の促進計画  
 研究課題名（英文）Community-based ‘Landscape Use’ Promotion through utilizing the local database of oral records (Landscape Use Database System)  
 研究代表者  
 神吉 紀世子 (KANKI KIYOKO)  
 京都大学・大学院工学研究科・准教授  
 研究者番号：70243061

研究成果の概要（和文）：地域コミュニティが地域資源の再評価・活用を通じ自力で景観保全に取り組むことを支援することを目標とした、口述集積型の景観利用データベースの作成とその活用の実践的方法について、早川町（山梨県）、上町台地（大阪市）、ボロブドゥール地方（インドネシア・中部ジャワ）等の地域づくり活動と直接連携して研究した。その結果データベース作成と、地域資源と実地に直接関わるアナログな活動を連動させることの効果が評価された。

研究成果の概要（英文）：This research was composed with case studies in Hayakawa (Yamanashi), Uemachi-daichi(Osaka), Borobudur Sub district(Indonesia), and others, where the authors have directly collaborated with the inhabitants’ activities toward promoting the landscape conservation through re-evaluating and utilizing local resources by the initiative of local community. We examined how to set up and utilize Database System as the collection of oral stories on landscape use, and examined the effectiveness of the linked program between the database and the on-site physical activities.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,700,000	810,000	3,510,000
2008年度	2,200,000	660,000	2,860,000
2009年度	2,400,000	720,000	3,120,000
年度			
年度			
総計	7,300,000	2,190,000	9,490,000

研究分野：工学

科研費の分科・細目：建築学 都市計画・建築計画

キーワード：景観計画 データベース ヒアリング調査 歴史的市街地・集落 住民参加  
山梨県早川町 上町台地 ボロブドゥール

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、地域コミュニティが自力で景観保全を行っていくことを支援・促進することをめざす取り組みの一環である。景観を地域の住民によって意味を与えられた種々の地

域資源によって構成されるものと捉え、その保全とは地域資源の特徴を成り立たせる人の営み（＝景観利用）を認識し持続発展させることであると捉える。制度的保全策の有無や学術調査の有無等に関わらず、どのような

地域コミュニティでも自力で取り組み得る景観保全活動として、地域資源とそれに関わる人の営みについて得られる知見を「口述」として収集し、口述集積型の景観利用データベースシステムを作成して情報を保持・更新し伝えやすくすること、そのデータベースを活用し景観保全につながる取り組みが行い易くなる方策について事例地における試行から提案したいと考えていた。

## 2. 研究の目的

本研究は、地域コミュニティが自力での景観保全につながるよう地域資源の再確認と活用を行うことを支援する口述集積型データベースの作成と活用する方法を示すことを目的とする。具体的には(1)データベース作成法(2)地域への導入とその効果(3)コミュニティの活動と連動した運営と地域資源活用の促進の可能性、を考察することとした。

## 3. 研究の方法

従来から地域コミュニティと協力した地域資源に関する口述収集作業の経験をもつ研究者により研究組織を構成し、その経験をいかせる事例地を主たる研究対象とした。各事例においては、口述収集を続けつつ事例の状況に応じたデータベース化を行い、さらに地域コミュニティの地域資源に関わる活動への参与調査を行った。主たる事例地を、国内では山梨県早川町、大阪府上町台地界隈、国外ではインドネシア・ボロブドゥール地方とし、和歌山県の伊都郡や田辺市上秋津、ネパール、スリランカ、ペルー等の歴史的市街地・集落の事例も扱った。事例ごとに調査を進めつつ、事例間に共通する知見を検討する会合をもち成果をまとめた。

## 4. 研究成果

### 4-1 山梨県早川町

#### 1) はじめに

山梨県早川町では、日本上流文化圏研究所(以下、上流研)による取り組みである「2000人のHP」により、全住民の口述収集とそのHPの公開が実施されている。住民の口述ベースの情報を収集し情報発信されている事例として随一の実績をもち、本研究に最も適した事例地と位置づけられる。上記の研究目的のうち、(1)データベース作成法、(2)導入とその効果、について既に一定の蓄積があることから特に(3)コミュニティの活動と連動した運営と活用の地域資源可能の促進可能性、について検討した結果を述べる。

#### 2) 「早川町ガイドブック」

現在早川町では、早川町全体をひとつの博物館・美術館と捉え、自然、歴史、文化、生業、生活といった資源を活かし、後世に残す

という、「早川フィールドミュージアム構想」の推進を、上流研、行政、住民グループ、民間企業、識者等が協力して行っている。その土地の歴史・風土・文化そのものを博物館又は美術館に見立て、住んでいる人と訪れた人が互いに価値を発見し活用するため、地域の資源を見直し、体験プログラムや散策・ツアーを実施し、地域の魅力の発見と創造を図ってきている。その一環として、フィールドミュージアムで活用される地域資源や、ツアーのみどころ解説等をまとめた「早川町ガイドブック」を作成する準備がなされてきた。

### 3) 調査の方法

データベースの活用として、最も効果的な1つが、ツーリズムでの活用である。上流研で行っている「早川フィールドミュージアム」は、行政、住民グループ、民間企業、学識者らが協働して事業の企画や実施を行っており、「コミュニティの活動と連動した運営」を実験的に検討する上で適切であると思われる。そこで準備が行われつつあった「早川町ガイドブック」の制作とタイアップし、データベースに蓄積された地域情報を地域住民や地域訪問者とともに、いかに活用していくか試行を通じて検討することとした。

### 4) ガイドブック制作体制と制作過程

早川町6地区ごとに、10名程の町民からなる制作委員会(計58名)が中心になり、議論と現地踏査から地域資源を探し出し、それらについての調査結果を情報カード化し(新たなデータベース化)、その中から掲載事項を選び冊子に編集した。この制作過程設計が新たな資源を見出すなど、地域を見なおす契機となっている。地域資源623個がカード化



写真 1-1 リストアップの様子 写真 1-2 項目選択の様子



写真 1-3 作成されたガイドブック

され、最終的に 195 個の地域資源を掲載した 12 冊の手づくりガイドブックが完成した。

#### 5) 論考

本節では「2000 人の HP」を既に運営している上で新たに行ったガイドブック制作を通じ、コミュニティの活動と連携した運営と地域資源活用の促進を探究した。

地域資源に関するデータベースは、これまで地域情報を Input することに主眼がおかれ、データベースを活用するための Output のあり方が模索され課題となっていた (図 1-1)。

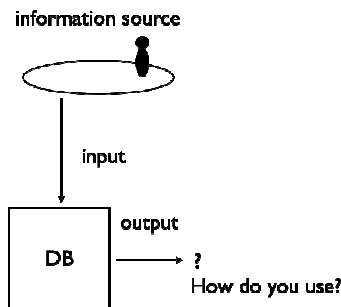


図 1-1 データベース活用の現状

本事例では、情報ソースと情報の受け手との関係を重視し、一度情報ソースをデータベースに Input するとともに、データベースからの Output として「ガイドブック」を位置づけ、それを情報の受け手としての来訪者に届けることを第一目的としつつも、情報を受け取った来訪者が更なる地域の詳細情報を得られるよう、情報ソースである地域住民とのコミュニケーションを促す機能として「道草クイズ」や「データベース」の URL を記載するなどの工夫を行った。情報の受け手を受動的な姿勢から地域住民とのコミュニケーションを図る能動的な姿勢へと転換することを意図している。これにより真のデータベースの利用促進が可能となり、地域内外の人々がそれぞれ積極的に交流を図る場面が創られると期待される。情報の受け手の活動と地域住民との地域における交流が、景観利用 (Landscape-Use) の促進であると考え。従って、一般論としてデータベースを通じ

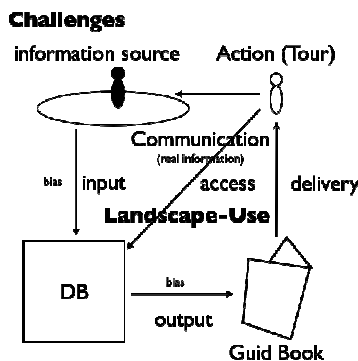


図 1-2 早川でのデータベース活用の試み

た景観利用促進のためには、データベースのインターフェイスを簡易なメディアによって作成し、それを積極的に情報の受け手に届けること、さらに、情報の受け手が、能動的に活動するように工夫し、情報ソースである情報の送り手とコミュニケーションすることを促すとともに、データベースへのアクセス性を確保し、さらなる情報を獲得できるようにすることが有用だと考えられる。

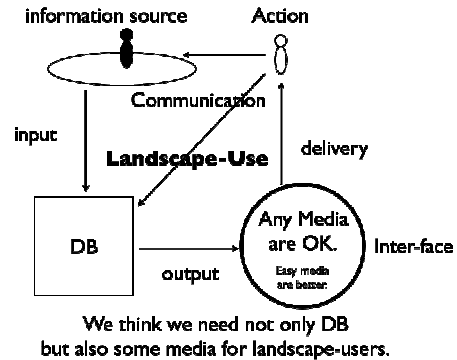


図 1-3 データベース活用の一般論

#### 4-2 大阪上町台地界限

##### 1) はじめに

上町台地界限は、長い居住地としての歴史の中で育まれた固有の資源が豊富に存在し、そうした資源に関わる活動も活発な地域である。近年、文教地区としても知られる同地域では、新設高層集合住宅建設に伴い、通勤・日常生活の利便性、子供の教育環境を求める新規居住者が転入し、急激な人口増加が生じている。新規居住者は、地域資源やそれに関わる活動に関心があっても、どのように地域資源に関わる活動に参加することができるのかわからない状況にある。そうした状況の中、地域資源やそれに関わる活動がゆるやかに連携することを目指し 2003 年に設立された「上町台地からまちを考える会」が運営者となり、「上町台地.cotocoto」という地域資源データベースが 2006 年に構築された。また、テーマをきめて地域資源を紹介する U-Coro プロジェクトという展示活動が 2007 年から地域内で実施されている。この 2 プロジェクトの運営に関わりつつ、大阪都心部における地域資源情報の収集プロセスを重視した発信活動の意義を検討する。

##### 2) 上町台地.cotocoto の概要

「上町台地.cotocoto」は、地域資源やそれに関わる活動に関心を持つ居住者に対して地域イベント情報と地域資源情報の発信を行うことを目的として開発されたデータベースである。「上町台地.cotocoto」は、ユーザー投稿型のイベントポータルサイトと、

そのポータルサイトに記載された地域資源についての解説が格納されている「上町台地.cotocoto+」が連動して成り立っている。イベントのポータルサイトを構築したのは、上町台地に関わる会のメンバーが、地域資源を活用したイベントの企画者になっていることが多く、イベントを通じて、地域資源や地域活動に関心を持つ居住者と実際に出会うことを目指しているためである。



図 2-1 上町台地.cotocoto (<http://uemachi.cotocoto.jp/>)

### 3) U-CoRo プロジェクト

上町台地境界に立地する大阪ガス実験集合住宅 NEXT21 の 1 階北側にあるスペースでは、「上町台地コミュニケーション・ルーム (U-Coro)」と称して、地域の歴史や文化の再発見、減災文化の創造、多世代・他文化の共生、自然・環境の再生等をテーマに 3 ヶ月間毎にコンテンツを入れ替えながら、U-Coro プロジェクトというウィンドウ・エキシビションが行われている (写真 2-1)。



写真 2-1 上町台地コミュニケーション・ルーム

U-CoRo プロジェクトは、展示やイベントの企画打ち合わせ、取材等の情報収集等による情報収集活動と、展示やイベントの開催、リーフレットの設置等の情報発信活動から成る。情報収集活動においては、有志のプロジェクトメンバーによる取材を居住者に対して行うことで、地域資源と積極的に関わっている居住者から地域資源に関するエピソードや写真、資料など地域資源との関わり方の情報を収集する。このプロセスの中では、まずテーマに関連してプロジェクトメンバー

が知っている居住者に取材を依頼し、その居住者からさらに別の居住者を紹介してもらうことで取材対象となる居住者を「芋づる式」に発掘していることに特徴がある。

### 4) 情報収集プロセスを重視した発信情報

「上町台地.cotocoto」はイベントポータルを備えたシステムではあるが、実際の居住者と地域資源との関わり方に関する情報が掲載され難いこともあり、このシステムだけでは、居住者が、地域資源を介して他の居住者とのつながりを形成することは難しい状況がある。U-Coro プロジェクトが始動してから、情報収集活動における取材を通じて、①地域活動に積極的に関わる居住者の地域資源との関わり、界隈の歴史や文化のことに詳しい居住者の地域資源との関わり、といった「上町台地.cotocoto」にない情報が発信されるようになった、②従来、地域資源との関わりを持たなかった居住者が、U-Coro プロジェクトのイベントや取材を契機に、関心をもって参加するという実績が得られた、ことから、データベース「上町台地.cotocoto」のシステムと、情報収集プロセスを重視した情報発信を行う U-Coro プロジェクトが相互補完的な役割をもつことが確認できた。

### 4-3 ボロブドゥール地方 (インドネシア)

#### 1) はじめに

インドネシアのボロブドゥール地方では、世界遺産ボロブドゥール寺院が世界的観光地として知られるが、近年、寺院遺跡の周囲に広がる農村地域の広域景観の保全の必要が議論されている。並行して、農村の地域資源活用による地域づくりが市民組織等により取り組まれている。農村の衰退は、景観の質低下につながるだけでなく、寺院遺跡への過度の経済活動集中問題の悪化につながる可能性があることから避けるべきであり、本研究の研究代表者らは以前から、現地のガジャマダ大学の研究者らとともに議論の場に参加していた。そのなかで 3 つの村で住民の口述を収集したデータベースの第一版を作成していた。そこで今回、データベースの各村への反響のモニタリングと、地域資源活用の取り組みの進展への参与観察を行った。

#### 2) 市民組織とその活動

まず、ボロブドゥール地方広域にわたって地域資源活用に関わる活動を行ってきた市民組織に着目し、近年 20 年余の間の連携関係を分析した。この間、寺院の観光化・全国レベルの経済危機・寺院近傍での商業開発問題・その撤回後の 4 期ごとに連携の変化があ

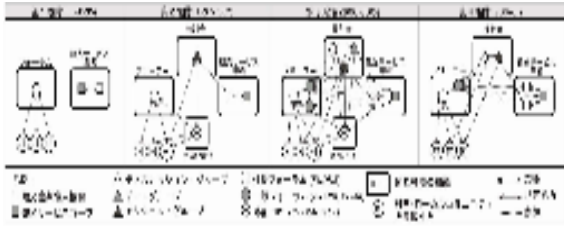


図3-1 ボロブドゥール地方の市民組織間関係の変化  
り、2006年以降の第4期は市民組織が外部からの支援を介さず相互連携が成立する状態になっている(図3-1)。筆者らがデータベース作成を行ったのは第3期に該当する。

### 3) 農村観光の拡がり地域資源活用

2009年時点でボロブドゥール寺院近郊の10村において農村観光(Desa Wisata)が実施されていることが把握できた(図3-2)。標準的な観光活動は、農村観光を手掛けているガイドに少人数の客が引率され、集落からの寺院眺望、集落内の遺跡訪問、地場産業訪問、農家民泊、食文化体験等からなる。農村観光を各村に導入する契機を作ったのは、有志の観光ガイド個人や上記2)の市民組織で、2)の第3期後半には2村、第4期には4村で村が観光に主体的に対応するための組合組織が設立された。農村観光の拡がりには、ガイド個人や市民組織による地域資源の再評価から、集落での地域資源管理組織の設立に至るといふプロセスがあることがわかった。このうちのチャンディレジョ村では2003年には組合組織が設立され、住民による自立した観光マネジメントの成功例として知られている。今回の調査で1980年代以来の住民協働による生活環境改善・農産改善・集落文化の洗練の取り組み経過があり、その延長上に観光マネジメントを実現させたとわかった。



図3-2 2009年時点の農村観光ルート

### 4) データベースと農村観光

口述集積データベースを作成したのは、上記10村に含まれる、チャンディレジョ、2008

年に組合組織が設立されたギリテンガ、現在未設立のリンギンブティであった。当時、地域資源活用にまだ差がある状況の3村で同じ手続きでデータベース制作を行ったところ、収集できた情報の種類や量に大きな差はなかった。完成したデータベース第一版(図3-3)を各村に提供した反響としては、地域資源活用の議論より、さらなる口述情報の提供が多数であった。一方、今回の参与観察によれば、チャンディレジョが当時からデータベースにも記載された地域資源をよく活用していたのに対し、他の2村では第4期以降に農村観光導入にむけ地域資源発掘やワークショップが改めて住民自身により行われた(写真3-1)。このことから、地域資源の保全活用には、顕在潜在する情報収集を行うには口述集積データベース制作により一定の成果を得られるが、具体的な地域資源活用の活動の促進には、当事者による実地の再評価活動が効果的であるとみられる。



図3-3 データベーススライアウト 写真3-1 地域資源の再評価  
(冊子版として地元へ提供) ワークショップ(2009年11月)

### 4-4 かつらぎ町四郷(和歌山県伊都郡)

#### 1) はじめに

四郷は串柿産地として知られ、柿干しが行われる秋期に多くの観光客が訪れる。本節では平地区を対象とし、串柿に関わる景観利用を明らかにする口述収集を行った。

#### 2) 串柿作りの生業景観

10月下旬に柿の干場(柿屋)による特徴的な生業景観が現れる。平地区の景観変遷過程は: ①桑畑、林産業から次第に串柿に推移する昭和5~50年(集落は縮小傾向で柿屋は民家周辺の高い位置) ②串柿生産が最盛期とな



写真4-1 平地区における柿干しの風景

り、道路舗装による微気候変化が沿道の低い位置の柿屋設置を可能にし、柿干しが目立つようになる昭和50年代 ③柿干し景観が観光資源となる昭和60年代以降、である。

#### 3) 生業にかかわる景観と景観利用

景観利用調査から、道路舗装や観光化等、現代化に合致しつつ串柿産業が安定し景観の評価も高くなった経過が明らかになった。

#### 4-5 まとめ

各事例とも、データベース制作とともに、ガイドブック・U-coroプロジェクト・ワークショップ・農村観光といった実地の活動が設定された。地域資源活用を促進するには、人へ直接働きかけ情報を認識させるアナログなしくみをデータベースとあわせて設定し、再認識や人のつながりがフィードバックされるしくみ(図 1-3)が効果的と評価された。

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計7件)

- ① Titin Fatimah, 神吉紀世子、インドネシア・ボロブドゥール区レベルにおける文化的景観保全イニシアチブのための市民組織間関係に関する研究、日本都市計画学会都市計画論文集、査読有、44-3、2009、pp. 205-210
- ② Titin Fatimah, 神吉紀世子, 高田光雄, The network structure of citizen's newly-established organizations in Borobudur Sub District, Indonesia, 2009年度日本建築学会大会大会学術講演梗概集、査読無、E-2、2009、pp. 437-438
- ③ 宮川智子・金谷真由・福井美弥・藤本勝也・前田貴志・本塚智貴、高野山東側集落における縮小に伴う景観・生活の変遷、2009年度日本建築学会大会大会学術講演梗概集、査読無、E-2、2009、pp. 575-576
- ④ 藤井達也・金谷真由・澤井 遼・前田貴志・宮川智子、民家の特色と土地利用から見た高野山西側集落・湯川における集落景観、2009年度日本建築学会大会大会学術講演梗概集、査読無、E-2、2009、pp. 577-578
- ⑤ 神吉紀世子、農山漁村における景観の保全課題、日本建築学会大会都市計画部門研究懇談会資料、査読無、2009、pp. 17-20
- ⑥ 柴田尚子, 安枝英俊, 高田光雄、大阪都心部における地域資源の情報収集及び発信活動に関する研究—上町台地界隈におけるU-CoRo プロジェクトを通じて、都市住宅学(63)第16回学術講演会研究発表論文集、査読有、2008、pp. 63-68
- ⑦ Titin Fatimah, 神吉紀世子、インドネシア・ボロブドゥール地方・チャンディレジョ村にみるコミュニティ主導型のグリーンツーリズムの実現プロセスに関する研究、日本都市計画学会都市計画論文集、査読有(年間優秀論文賞)、No. 43-3、2008、pp. 517-522

[学会発表(国際会議)] (計2件)

- ① Masahiro MAEDA, Mitsuo TAKADA, Kiyoko KANKI, Design Principles for Sustainable Resettlement Area in Terms of

Reorganization of Community Network: The Case Study of Housing Situation of Sri Lankan Fishery Households after the Indian Ocean Tsunami in 2004、The 10th International Congress of Asian Planning Schools Association (APSA 2009) (審査有)、2009/11/25、Ahmedabad, India

- ② Baldeon, Jarumi and Kanki Kiyoko, Children's Participation in Heritage Awareness: case study of the Historic Centre of Lima, HERITAGE2008 International Conference, World Heritage and Sustainable Development (審査有)、2008/5/8、Vila Nova de Foz Coa, PORTUGAL

[図書] (計1(12冊1セット)件)

- ①ガイドブック制作委員会 (山崎義人, 田口太郎 他)、NPO 法人日本上流文化圏研究所、町民が取材した手づくりガイドブック めたきけし 01-12 (01 今なお信仰に生きる山里(本建地区 七面山関連編), 02 照葉樹林の村(本建地区 集落紹介編), 03 農業に適した山里(五箇地区編), 04 縄文遺跡が残る山里(五箇地区 樽坪・千須和・笹走編), 05 茅葺き民家が似合う山里(五箇地区 葉袋・古屋・塩之上編), 06 硯と金の産出地(硯島地区 地区全体編), 07 山の活気を伝える地(硯島地区 大島〜老平編), 08 名硯の生まれる山里(硯島地区 本村〜長畑編), 09 川の都と呼ばれた地(都川地区編), 10 林業と発電に沸いた地(三里地区 新倉・茂倉編), 11 田園風景の広がる地(三里地区 早川・塩島・大原野・中洲編), 12 自然の魅力溢れた秘境(西山地区編))、2009、306p.

[その他]

ホームページ：<http://www.joryuken.net/gb/gb2009.html>, <http://uemachi.cotocoto.jp/>, <http://desagiritengah.wordpress.com/>

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

神吉 紀世子 (KANKI KIYOKO)  
京都大学・工学研究科・准教授  
研究者番号：70243061

##### (2) 研究分担者

宮川 智子 (MIYAGAWA TOMOKO)  
和歌山大学・システム工学部・准教授  
研究者番号：30351240  
山崎 義人 (YAMAZAKI YOSHITO)  
兵庫県立大学・自然・環境学研究所・講師  
研究者番号：60350427  
田口 太郎 (TAGUCHI TARO)  
新潟工科大学・建築学科・准教授  
研究者番号：20367139  
安枝 英俊 (YASUEDA HIDETOSHI)  
京都大学・工学研究科・助教  
研究者番号：60402971